

第二章 人間・創造

I 造られた存在としての人間

人間がどのようにして存在するようになったか。その質問に回答を与えているのは聖書だけである。(創世 1:26、27) しかし、聖書によらずにこの疑問に答えようとした人達は人間の起源を何とか説明しようと、多くの推論を試みた。それらの互いに相反する説明は、聖書以外には何ひとつ人間の起源について確かな情報はないということを示している。

1 進化論

人間創造の教理に反対して起こった最も一般的な見解の一つが進化論である。この学説は一個の生命をもった細胞がどのようにしてか存在しはじめ、それが自然淘汰の過程を経て進化し、人間あるいは様々な生物ができあがったとする。

2 種類に従って

進化論によると、すべての生物は突然変異によって実現する小変化の一連の作用によって形造られたと言う。この突然変異が生物の種を説明している。しかし、突然変異では有益なものではないし、新種が誕生したという記録はない。

聖書はその種について、神は生物を「その種類に従って」創造されたと記録している。(創世 1:11、21、24、25)

3 神のかたちに

神の創造の御業において、人間は神のかたちに似せて造られた、と聖書に書かれている。(創世 1:26、27) 人間が進化の頂点に立っているのではなく、神が他の動物とは違って、特別に造られたのであることがわかる。

4 有神論的進化論

神が進化を創造の方法として用いられたとする有神論的進化論は聖書の中の創造の記述の字義通りの意味を否定することによって成り立っている。

5 聖書における創造の記述

人間の創造の教理は聖書に明白に教えられている。(創世 1、2 章、ヨハネ 1:3、コロサイ 1:16、ヘブル 11:3 他) しかし、聖書を神の靈感による書として認める人々の中にも創造の日については、ギャップ再創造説、24 時間 6 日間説、一日は 24 時間よりも長い、あるいは短いという説など、様々な説明がなされてきた。けれども、神がすべてのものを創造されたとすることに関しては一致している。

II 人間の性質

聖書の証言によれば人間は、あらゆる創造の完結、完成のわざとして神によって創造された。神に似るように、神のかたちに造られ、(創世 1:26) いのちの息を吹き込まれた。(創世 2:7) この点において人間は他の被造物と区別され、知性、感受性、意志を備えた道徳的被造物であることを示している。

大きく分けて言えば、人間は物質的な要素(ちり)と、非物質的な要素(いのちの息)とを含んでいる。この区別は「外なる人」と「内なる人」(Ⅱコリ 4:16)「土の器」と「この宝」(Ⅱコリ 4:7)とも呼ばれている。肉体はもとのちりに帰り、霊はそれを与えてくださった神のもとに帰る。(伝道 12:7)

1 非物質的な部分

聖書によると人間の非物質的な部分は、霊、たましい、心、思い、良心、意志といったさまざまなことばで表現されている。普通、霊とは神と交わることのできる部分として、たましいとは自我、知性、感受性、意志のさまざまな機能に関連する人間の部分として描かれている。しかし、これらの間には明らかな区分はないし、時には肉体をも含めた全人格を指すのにも用いられる。

この非物質的な部分の起源について聖書は、ある異教によって信じられているように先在し、人間としての存在開始とともに肉体をもつようになったという見解は支持しない。また、ある神学者が提示するように、人間の存在の初めに神によって創造されたとする説にも難点がある。おそらく最上の見解は、伝移説として知られるもので、自然発生的に遺伝されるという説である。

2 物質的な部分

人間の体は人間が死ぬまで、その人のたましいと霊の住みかである。「肉体」、「聖霊の宮」、「土の器」と呼ばれているが、「肉」と言うとき、それはたましいや霊を含めた罪深い性質を表すのに使われている場合がある。(ガラ 5：24) 人間のからだは死によって朽ちるが、やがてよみがえらされる。救われた者のからだはキリストの再臨のときに変えられ、きよめられ、救われ、贖われ、栄化される。(ロマ 8：11、17、18、23、I コリ 6：13-20、ピリ 3：20、21)